

〔論 文〕

# モンゴル文語とモンゴル語の言文一致の問題<sup>1</sup>

——「前近代」の文字を使い続ける内モンゴルの言語規範——

フフバートル

The Issue of Unity between Written and Spoken Mongolian:  
Linguistic Norms in Inner Mongolia that Continues to Use “Pre-modern” Script

BORJIGIN Huhbator

The Mongolian written language and the traditional Mongolian script were a “pre-modern” language and script that transcended ethnicity and dialect. The Mongolian script can be read in any dialect. However, modern languages demand pronunciation norms, making the Mongolian script unsuitable as the official script of a modern nation-state. The countries and regions that used the Mongolian script changed the script in the first half of the 20th century, except for the Mongolian ethnic areas of China which continued to use the original Mongolian script. This was possible as Mongolian was a minority language in China, and the scope of its use was limited.

However, Inner Mongolia, too, faced the issue of the written language not conforming with the spoken language. Therefore, in the 1930s, Mongolian literary figures and others in Manchukuo attempted to unify the Mongolian written and spoken language based on the *genbun itchi* movement in Japan. *Genbun itchi* sought to unify the Japanese written and spoken language, and was translated literally as “üge üsüg-i nigen bolʻaqai” in Mongolian. This effort was only partially successful in changing the Mongolian script to match the spoken pronunciation, and systematic *genbun itchi* could not be achieved. Since 1945, Inner Mongolia learned from the example of the Mongolian People’s Republic and transformed the style of Mongolian script to that of modern Mongolian while still using the Mongolian script. However, the discord between the Mongolian script and the spoken pronunciation remains unresolved, and to address this, changes are being made to the Mongolian script to this day as they have been for the last eight decades. It is important to know that the Mongolian script is not only the modern script used in Chinese territory, but also the traditional script of the written language common to areas using the Mongolian written language. For this reason, the Mongolian script must be passed on to future generations.

A means for unifying the Mongolian language while using the Mongolian script is to follow the Hanyu Pinyin system, which has succeeded in standardizing pronunciation while using Chinese characters — namely, enhance the Inner Mongolian “standard-sounding” writing system so that it can also function at the sentence level. The orthography of the Cyrillic alphabet of Mongolia offers an objectively good example for the development of a standard-sounding writing system in Inner Mongolia. After all, the problem of the Mongolian script reform comes down to that of *genbun itchi*.

*Key words:* written Mongolian (モンゴル文語), spoken Mongolian (モンゴル語口語), unity between written and spoken Mongolian (モンゴル語の言文一致)

## はじめに——漢字圏の言文一致とモンゴル語の言文一致

日本語の「言文一致」という用語は中国語と朝鮮語にも漢字音で導入され、同じ意味で使用されているが、多くの新しい概念がそうであったように、概念としての「言文一致」は日本で創られたものではなかった。「言文一致」は「国語」の獲得のために、世界的規模で行われた言語運動の、日本語による表現であった<sup>2</sup>。

もし、言文一致が言語の近代化の一環だと考えられるなら、それは文体と文字の発音の近代化になる。漢字圏の言文一致の問題は漢文と漢字音と密接な関係があるため、漢字圏の言文一致は漢文と漢字音についての改革であった。つまり、漢文と漢字圏の話しことばとの関係は、基本的に漢文体とそれぞれの言語の口語体、そして、漢字とそれぞれの言語の漢字音や方言の発音との関係であり、漢文体と諸言語の口語体及び、漢字と諸言語の漢字音の間に共通性や規範が求められなかった。こういう意味で、漢文と漢字圏諸語の関係は、ラテン語とヨーロッパ諸語の関係のような、「前近代」、または帝国時代の文語と諸口語の関係であった。しかし、日本の明治時代から東アジアでも国民国家が登場することにより、「国語」、あるいは、現代の書きことばが作りあげられるようになった。それにあたり、文体においては漢文体と標準語となる話しことばの口語体との関係が、そして、文字の発音においては漢字と話しことばとの関係が漢字音の標準化をめぐる調整されなければならなかった<sup>3</sup>。

一方、モンゴル語は漢字圏の言語に含まれないため、言文一致を進めるにおいて漢文や漢字音と直接調整することはなかったが、モンゴル文語に含まれていた翻訳による漢文と満文（満洲文語）の影響が、新しい書きことばに口語が導入されることにより次第に排除されるようになった。漢文体はモンゴル文語において公文書以外に、文学にも直接影響を与えていたが、満文を通しての影響も報告されている。満洲語は文の構造がモンゴル語に酷似しているため、満洲文語のモンゴル文語に与えた影響はこれまであ

まり注目されなかったようだが、その文体の影響はモンゴル人民共和国では1930年代まで続いた<sup>4</sup>。1930年代はいろいろな意味で言文一致による現代モンゴル語書きことばの形成において重要な時期であった。

いずれにせよ、モンゴルは漢字圏に含まれないにもかかわらず、モンゴル文語は「前近代」において、翻訳を通して漢文、また漢字語彙の影響を受けていたため、近代におけるモンゴル語の言文一致の進行過程において漢文体の影響の変遷を辿ることは、モンゴル語の言文一致について考える際、注目すべき一つのポイントとなる。本論ではこうした視点も含め、モンゴル語の言文一致の問題を、上記漢字圏のごとく、文体と文字の読み方、つまり、モンゴル文語体の「改革」及び、モンゴル文字の読み方の規範化という視点から、モンゴル文語、または、古いモンゴル語書きことばと口語体及び口語の発音との関係を考察する。具体的には、現在もモンゴル文字を使用し続けている中国領内のモンゴル語使用地域、特に、現在の内モンゴル自治区におけるモンゴル語の言文一致や言語規範の問題に焦点をあてる。

### 一、世界のモンゴル学者たちが見た モンゴル文語とモンゴル文字（一）

モンゴル人はチンギス・ハーンの時代から伝統的なモンゴル文字を使いはじめ、モンゴル文字は方言を超えた文字と言われてきた。ここではまず、モンゴル文字によるモンゴル文語とモンゴル文字自体について、世界のモンゴル語研究の先駆者たちの反応と記述を概観し、モンゴル人学者を含む世界の学者たちの見解を通して、20世紀初頭におけるモンゴル文字による古い書きことば（文語）と話しことば（口語）との隔たりを見る。

#### 1. フィンランドのアルタイ学者 G. J. ラムステッド

第一次世界大戦後ロシア帝国から独立をしたフィンランド共和国の初代駐日代理公使としても知られるアルタイ学者 G. J. ラムステッド (G. J. Ramstedt 1873-1950) は 1899 年の冬初めて外モンゴルに入り、ウルグー（現、ウランバートル）での調査について次

のように記している<sup>5</sup>。

この期間中に私のモンゴル語は、かなり上達し、モンゴル人の物の考え方も少しはわかるようになった。(中略)

モンゴル語の読み書きの師として、一人の年配のラマ僧を雇った。古いモンゴル語で書かれた文献についての知識があり、多少なりとも読むことのできる、数少ない貴重な一人である。たいていのラマ僧は、せいぜいチベット語の祈禱書が読める程度だった。

続いて、ラムステッドは同年夏のこととして次のように記す<sup>6</sup>。

私はすでに日常会話のモンゴル語も、現在でも書物の中で使われる古いモンゴル語の書き言葉も習得していた。これら二つのモンゴル語の間にはラテン語とフランス語、あるいは少なくともラテン語と現代イタリア語と同じくらいの差異があり、この二種類のモンゴル語は別々に学ばなければならなかった。

その時点ですでにラテン語、ギリシャ語、ロシア語、ヘブライ語、サンスクリット語などを習得していた<sup>7</sup>ラムステッドならではの比喻であった。モンゴル文語の歴史はそれほど長くないため、現在の内モンゴルのモンゴル人のようにモンゴル文字を先に学んだモンゴル人にとっては、モンゴル文語と口語との差はそれほど大きく感じられないが、言文一致が果たされたキリル文字による現代モンゴル語を先に学んだモンゴル国のモンゴル人の間では、モンゴル文字を学ぶことが英語の習得にも匹敵する負荷を伴うこととして話題になっているのも現実である。

## 2. ロシア・ソビエトのモンゴル語学者 A. D. ルードネフ

ロシアのモンゴル語学者 A. D. ルードネフ (A. D. Rudnev 1878-1958) の研究は日本では大正8年(1919)に『蒙古文典』(非売品)として京都大学の関係者により翻訳されている。その中でルードネフはモンゴル文語と口語との関係について次のように述べている<sup>8</sup>。

蒙古の文語を研究するに當りては、其の文語は三百萬の蒙古人の用ゐる言語の反映にして、紙上の文字はその音を寫せるものなることを記憶せざるべからず。蒙古文語は口語と大なる差異を有するものなれば、普通の蒙古人は文語を聞くもこれを解する能はざるなり。

現在のモンゴル国の人口は約320万であり、ここでの「三百萬」とは言うまでもなく、当時の内外モンゴルを含めた人口であった。ここで強調されたのはまず、モンゴル文語はモンゴル人の口語を反映したものではないこと、そして、普通のモンゴル人はモンゴル文語を聞くこともそれを理解することもできないことであった。

モンゴル文字をあまり知らないモンゴル人がモンゴル文字転写の発音によるモンゴル語がどれほど聞き取れるのか。実際、筆者はモンゴル国の60歳代の人たちを対象に確認したことがあった。例えば、Degüü-tei kümün dögürege isgülün-e (Дүүтэй хүн дөрөө өшөглөнө 弟をもつ人は得をする)ということわざをモンゴル文字の転写通りに、<sup>ドゥーテイ</sup> <sup>クムン</sup> <sup>ドゥル</sup> <sup>ゲ</sup> <sup>イス</sup> <sup>グル</sup> <sup>ネ</sup> (ルビは現代語の発音)と発音して聞かせたところ、まったく意味が理解できず、「これはモンゴル語ですか」と聞かれたほどであった。ちなみに、モンゴル国では現在の60歳代の人たちは社会主義時代に育ち、教養のある人が多く、遊牧民でもキリル文字による読み書きがよくできる。

## 二、世界のモンゴル学者たちが見た モンゴル文語とモンゴル文字 (二)

### 1. 1920-30年代の日本人大藪鉦太郎と出村良一教授

日本で比較的早く出版されたモンゴル語研究書として、大連にあった満洲日日新聞社から1920年に出版された大藪鉦太郎著『日本語と蒙古語』がある。著者は、南満洲鉄道株式会社奉天運輸事務所長であり、鉄嶺に駅長として勤めながら十数年にわたってモンゴル語を研究し、本書を著している。したがって、本書は当時の日本の政策であった「満蒙開発」の実践のための実用性を目的として書かれたもので、「第一章 緒論」に「本書の目的とするところは、

日蒙文學上の研究を主としたのでなく、實際の必要上我國に最も密接の關係ある、東蒙古の口語に就て、日本語との異同を對照し、志ある人々の参考としたい<sup>9</sup>とあることから、内モンゴル東部のモンゴル語を学ぶ日本人のための教科書として書かれ、同時に外国人がモンゴル文字で現代のモンゴル語口語を学ぶ最前線からの報告書であったと理解することができる。

では、著者は当時モンゴル文字と口語との関係についてどのように表現していたのか、同書第五章から引用する<sup>10</sup>。

蒙古語の發音を、蒙古文字によつて覺へるといふことは、初學者の爲め可なり難事であるから、是非とも日本假名によつて、蒙古語の發音を、完全に書きあらはし得るやうにすることは、蒙古語研究者の爲めに、最も必要なる條件の一つであらうと考へる。蒙古の綴字法が、英語のそれと同様であるから、「アルハベツ」を以て、蒙古語の發音を書きあらはすといふことは、字畫を見る點に於ての便宜はあるけれども、發音の正確を主とする會話の練習には、左ほど必要を認めない。(中略)

蒙古文字それ自身が、蒙古口語の音を直寫し得られないのがある。例へば「エ」「ケ」「セ」「テ」「ネ」等の音を書きあらはすのに、蒙古字では、「アイ」「カイ」「サイ」「タイ」「ナイ」と書かねばならぬ。これも、蒙古の綴字を其儘示すが爲め、「アルハベツ」で、(ai) (kai) (sai) (tai) (nai) と書いたところが、何等の意義もないことである(中略)それだから、本書附録には、蒙古語の發音を示すのに、「アルハベツ」だの蒙古字などを一切用ひないで、すべて日本假名ばかりを用ふことにしたのである。

つまり、著者はモンゴル文字でモンゴル語の發音を学ぶことは難しいとし、日本語の仮名文字でモンゴル語を表記することを勧めている。實際の發音が「単母音」であるのに、モンゴル文字ではそれを二重母音で書かなければならず、また、それをローマ字で転写したところで、二重母音になることにはかわりがないので、いっそのこと、仮名文字で書いた方がモ

ンゴル語の發音をより正確に表せると主張している。

ここで挙げられた「エ」「ケ」「セ」「テ」「ネ」、または、(ai) (kai) (sai) (tai) (nai) の母音の音価は、短母音でも二重母音でもなく、現代モンゴル語の發音では長母音になっている。長母音を二重母音として表記することは、モンゴル文字の二重母音 eyi がキリル文字で ий と長母音として表記されていることを除き、現在のキリル文字正書法でも、モンゴル文字と同じく、長母音「エー」「オー」「ウー」<sup>11</sup>をそれぞれ ай, ой, үй と二重母音として表記しているため、キリル文字の表記通りに發音する外国人のモンゴル語の發音にそれが反映されている。例えば、сайн は「サイン」(よい)、сайхан は「サイハン」(すばらしい)、баяртай は「バヤルタイ」(うれしい、さようなら)と發音されがちである。しかし、本書では、sayin (сайн) は「セーン」<sup>12</sup>、sayıqan (сайхан) 「セーハン」<sup>13</sup>、bayartai (баяртай) は「バヤルテ」<sup>14</sup>と記述されている。このカタカナ表記は現在のモンゴル国の標準語の發音においても適用され、大藪鉦太郎の指摘や主張は現在においても有効である。

次に、モンゴル文字に関する日本人研究者の見解として、東京外国語学校(現、東京外国語大学)教授出村良一による昭和7年(1932)の記述には以下のようにある<sup>15</sup>。

又極めて最近に於いてはソヴェト聯邦内の蒙古人は今までの文字を廢止してローマ字を採用せんと準備してゐる。これはロシアの指導する處であるが、蘇聯内のトルコ族がローマ字採用を實行したのに刺激されたのであらうが、不便且つ不完全な回紇式文字は蒙古人のためには決して利益でないのであるから、一日も速かに實行されんことを希望するのである。

ここで、出村良一教授は、モンゴル民族に政治的影響力を及ぼすという意味では当時の日本にとってライバル、そして、敵国でもあったソ連に対して、モンゴル文字を消滅するための同化行為などと批判していない。「不便且つ不完全」と言ったのは、モンゴル文字が縦書き文字で、また、後述するようにモンゴル文字は、円唇母音 o と u, ö と ü 及び子音文字 d と t, g と k に表記上の違いがないことなど

を意味しているだろうが、「蒙古人のためには決して利益でないのであるから、一日も速かに実行されんことを希望する」との意見は、まさに、昭和7年(1932)、満洲国建国当時の日蒙(内モンゴル)関係下において日本の対蒙文化政策に提案できる立場にいたためとも考えられ、モンゴル研究に携わる日本人教授の立場からの発言であっただろうとも考えられる。しかし、日本の対蒙文化政策においてローマ字の推進や助長は確認されていない。

## 2. モンゴル語学者 N. ポッペとモンゴル国現役教授 D. トゥムルトゴー

モンゴル語研究の必読書として、世界的なモンゴル語学者ニコラス・ポッペ(Nicholas Poppe 1897-1991)の *Grammar of Written Mongolian*<sup>16</sup> が有名である。ポッペは第二次世界大戦中にソ連からドイツに逃れ、その後西ドイツからアメリカに移住し、1954年に上記の書物を執筆した。ここでポッペはモンゴル語の古い書きことばについて次のように述べている<sup>17</sup>。

モンゴル語の書きことばは東モンゴルの書きことばである。これは書面にのみ使用され、話されることはない。この言語とモンゴル人が話す諸方言との違いは、ヨーロッパで話される大部分の言語の書きことばと話しことばの違いより大きい。

ここで *Written Mongolian* を「東モンゴルの書きことば」と表現したのは、西モンゴルのオイラドにはトド文字による書きことばがあるからである。ポッペはこの *Written Mongolian* としてのモンゴル語の古い書きことばをここで *this language* (この言語) と表現し、モンゴル人が話す諸方言との違いが大きいことをヨーロッパの言語と比較して強調している。そもそも *Written Mongolian* という命名自体が「書くためのモンゴル語」と特定されることにより、言文一致が果たされたキリル文字による「書くこともできる、話すこともできる」新しい書きことばとはっきり区別されている。

さらに、外国人ではなく、モンゴル科学アカデミー会員、モンゴル国の現役教授 D. トゥムルトゴー

(D. Tumurtogoo 1938-) の「モンゴル文語」に関する見解を見る<sup>18</sup>。

古代モンゴル語の終期に形成したモンゴル語書きことばが現代モンゴル語とずれるようになったことと、中世英語の時期に形成した英語の書きことばが現代英語の実際の発音とずれるようになったことは、まったく同じプロセスをもっている。

モンゴル国にキリル文字が全面的に導入されたのは1946年からであったため、1938年生まれのトゥムルトゴー教授も実際、ほぼ小学校入学のころからキリル文字で教育を受けていることになる。そうであればモンゴル文字に対する認識も最初からモンゴル文字で教育を受けたモンゴル人とは異なり、モンゴル文字による書きことばとキリル文字による現代モンゴル語とのずれについてより強く反応する世代であろう。しかし、現在モンゴル国を代表する言語学者であるトゥムルトゴー教授は、この問題について自らの研究による視点を持ち、1983年に書いた論文 *Монгол бичгийн хэл* (モンゴル文語) でモンゴル語の *бичгийн хэл* (文語)、つまり、自身の英訳による *written language* をそれまでのモンゴル語研究の分類とは異なる「前古典的モンゴル文語」と「古典的モンゴル文語」の二つに分け、「古典的モンゴル文語」を19世紀末の作家インジャーナシの *Köke sudur* (日本語訳名『青き年代記』) までとしている<sup>19</sup>。トゥムルトゴー教授はここでモンゴル語の *бичгийн хэл* をあくまでも「古典」に限定し「文語」の意味で使っている<sup>20</sup>。このように、トゥムルトゴー教授にとって、モンゴル文字による書きことばは19世紀末までが「古典」であるため、20世紀以降もモンゴル文字を使用している内モンゴルのモンゴル語を他のモンゴル諸語と並べて *Өмөнөд монгол хэл* (南部モンゴル語) と分類し、*Төв монгол хэл* (中部モンゴル語) とは異なるモンゴル語とする見解をもっている<sup>21</sup>。

## 三、モンゴル文語・モンゴル文字の「前近代性」

### 1. モンゴル文字は「前近代」の文字

東アジア諸国で漢文は歴史的に共通の文語として

使用され、漢字は共通の発音を求められることなく近代を迎えた。しかし、近代以来の東アジアで漢字、または漢字音はそれぞれの近代国民国家の標準語の成立にともない、発音の規範が求められてきた。そのもっとも成功した例は、数多くの大方言（または「言語」）を抱える十数億人が話す漢語の発音＝標準語としての現代漢語に使われる漢字の発音が、1950年代の中国の言語政策により、「漢語拼音方案」という「中国語のローマ字表記」で統一されてきたことである。このように、漢字は発音に規範が求められない前近代の文字であったにもかかわらず、近代における言語規範のもっとも重要な要素である話しことばの発音の統一と連携されている。

漢語のローマ字化は19世紀から西側の宣教師を中心に行われ、1926年と1931年には中国政府側と中国共産党によってもそれぞれ「国語ローマ字」とラテン化新文字の導入が実施されていた<sup>22</sup>。しかし、中国語標準語普及に対するローマ字の目に見える成果は1950年代までは考えられなかった。このことは1954年10月から1957年7月までソ連政府派遣言語学顧問として中国社会科学院で中国語の標準語形成について理論的、実践的指導をしていたG. P. セルデュチェンコ (G. P. Serdyuchenko 1904-1965) 抜きには語れない<sup>23</sup>。

発音に規範が求められない点では、伝統的なモンゴル文字も同じである。「どの方言で読んでもよい」ことがモンゴル文字のメリットとして取りあげられる場合が多いが、それはモンゴル文字のメリットというよりむしろ、モンゴル文字の「前近代性」を象

徴するものである。伝統的なモンゴル文字及びモンゴル文字による文語は、モンゴル語諸方言を超えた文字・言語であったばかりでなく、20世紀30年代までは民族を超えた文字、書きことばでもあった。17-18世紀にモンゴル文語はチベット、ウイグル、カザフ、キルギスでも使用され、特にチベットでは重要な歴史的役割を果たしていた<sup>24</sup>。

ここに特記すべきことは、チュルク系のトゥバ語が話されるロシア連邦のトゥバ共和国では1930年までモンゴル文字によるモンゴル語の書きことばが「国語」として使用されていたことである。具体的には、当時のトゥバ人民共和国政府機関紙であったTiwa arad -un ünən (トゥバ人民のウネン) は1930年7月18日(図1)までモンゴル文字で発行され、1930年9月7日からはラテン文字によるトゥバ語のT'va Aratt'n Sh'n' (トゥバ人民のシュヌ) (図2)として発行されはじめた<sup>25</sup>。トゥバ語で発行されはじめた後も、同新聞の重要な情報としての新聞名、発行機関、発行年月日は一面の右上にモンゴル文字で記されていた。新聞名にあるモンゴル語の「ウネン」とトゥバ語の「シュヌ」はいずれもロシア語「プラウダ」(真実)の訳であった。

このように、モンゴル文字によるモンゴル文語、または書きことばがチベットやトゥバで使われてきたことは、まさに帝国の文字と文語であった満洲文字と満文が20世紀前半までモンゴルで使われていたのと酷似している。つまり、モンゴル文字、モンゴル文語も20世紀前半まで「帝国」=「前近代」の文字・文語であったと言えるのである。

トゥバ人民共和国の後期のモンゴル語新聞



図1 Tiwa arad -un ünən (トゥバ人民のウネン) No. 32 1930年7月18日 出典: フフバートル (2016)

トゥバ人民共和国の初期のトゥバ語新聞



図2 T'va Aratt'n Sh'n' (トゥバ人民のシュヌ) No. 37 1930年9月7日 出典: フフバートル (2016)

表1 モンゴル文語口語対比名詞格助詞・動詞時制・主な形動詞、副動詞語尾一覧

語尾	モンゴル文字転写	現代モンゴル語の発音	日本語
主格	-anu/-inü	[-n]	が
属格	-yin -un/-ün	[-i:ŋ]	の
属格	-u/-ü (-n の後に付く)	[-næ:] [-nœ:] / [-ne:] [-ni:]	の
与位格	-du/-dü -dur/-dür	[-d]	に, で
与位格	-tu/-tü -tur/-tür	[-t]	に, で
対格	-i/-yi	[-i:] [-i:g]	を
奪格	-ača/-eče	[-a:s] [-ɔ:s] / [-e:s] [-ø:s]	から
造格	-bar/-ber -iyar/-iyer	[-a:r] [-ɔ:r] / [-e:r] [-ø:r]	で
共同格	-tai/-tei	[-tæ:] [-tœ:] / [-te:]	と
共同格	-luγ-a/-lüge	ゼロ	と
動詞時制現在・未来形	-mui/-müi -nam/-nem -yu/-yü	[-n]	動詞終止形
動詞時制過去形	-čuqui/-čüküi -juqui/-jüki	[-tʃæ:] [-tʃœ:] / [-tʃe:] [-tʃœ:] / [-tʃe:]	～た
動詞時制過去形	-bai/-bei	[-β]	～た
形動詞完了形	-γsan/-gsen	[-san] [-sɔn] / [-sen] [-sɛn]	～た
副動詞假定形	-basu/-besü -qul-a/-kül-e	[-βal] [-βɔl] / [-βel] [-βe:l]	～(え)ば

## 2. モンゴル文語圏の「前近代」文字からの離脱

前述の通り、モンゴル文字が「前近代」の文字であるため、そのままでは近代国家の国語に使用されるには不適切で、国語の文字にするためには、中国語の「漢語拼音方案」のように、現代語の発音の規範としての口語表記体系を整備しなければならなかった。なぜならば、国語や標準語はまず発音の規範を求めるからである。モンゴル文字は、単語単位でつなげて綴る縦書き文字で、横には書けず、円唇母音の o と u, ö と ü 及び子音文字 d と t, g と k に、表記上の違いがないため、具体的な音価が判明できず、実際、同形異音異義語が多い。

モンゴル文語体と口語体の違いは主に、名詞格助詞、動詞の時制語尾、形動詞語尾や副動詞語尾などに見られる。主な語尾は表1の通りである<sup>26</sup>。

そして、モンゴル文字による単語の表記も現代モンゴル語口語との間には次に挙げるような大きな隔たりが見られる<sup>27</sup>。

- ① モンゴル文字の語末音節及び語中音節における単母音が口語の発音では無声化する。

例: ene (これ)→[en] baγ-a (小さい)→[bag] ekener (妻)→[exner]

- ② モンゴル文字の母音間の γ/g, b と -iy-a/-iy

-e が口語の発音では長母音化する。

例: čaγasu (紙)→[tʃa:s] debel (モンゴル服)→[de:l] kejiy-e (いつ)→[xedze:]

- ③ モンゴル文字の二重母音と短母音が口語の発音では長母音化、または長母音で発音されることがある。

例: ail (家)→[æ:l] teüke (歴史)→[tu:x] abu (父)→[a:β] sü (乳)→[su:]

- ④ モンゴル文字で前の音節と後の音声の異なる母音が口語の発音では同じ母音になる＝順行同化・逆行同化が起こる。

例: qabur (春)→[xaβar] qoyar (二)→[xɔjɔr] miq-a (肉)→[max]

- ⑤ モンゴル文字には現代モンゴル語の発音と大きく異なる「伝統的な書き方」がある。

例: qudduγ (井戸)→[xɔdag] ebedčün (病気)→[eβtʃɛŋ] kümün (人)→[xuŋ]

このように、モンゴル文字によるモンゴル語の文法的に意味を表す語尾も、単語の表記も、現代モンゴル口語の発音と大きな隔たりがあり、このような文字で国民全体の識字率を上げるには学習者の負担が大きいため、口語表記体系の導入が求められた。

1921年に外モンゴル(現在のモンゴル国)で二度

目の独立革命（モンゴル革命）が起きた当時、モンゴル文字がよくできる人は5,964人であった。これについて、モンゴル国の著名な学者 Ts. ダムディン スレン (Ts. Damdinsüren 1908-1986) は、「これは『全人口の1パーセントのみがモンゴル語の読み書きができた』という И. Майский (I. Maisky 1918年) による情報に合致しているが、これはかなり控え目の数字だと考えるべきで、実際、モンゴル文字がよく読める人は人口の3パーセントであっただろう。それに、モンゴル文字が書けなかったが、読めた人が5パーセントはあった」と考えていた<sup>28</sup>。

識字率がきわめて低かったことは、モンゴル文語を使用していた他の地域でも社会主義革命以前はそれほど変わるものではなかったであろう。そうした背景もあって、20世紀前半にモンゴル文語に対して口語の表記体系を導入できたのが現在のモンゴル国、ロシア連邦のブリヤート共和国、カルムイク共和国及びトゥバ共和国であった。いずれも、モンゴル文字、またはモンゴル文字に由来するトド文字をラテン文字に変え、その後キリル文字に変えている。

それに対し、モンゴル文字を現代社会生活に運用しながらも、口語表記体系の整備をしそびれたのが中国領内の内モンゴル自治区、新疆ウイグル自治区等のモンゴル人分布地域であり、これらの地域のモンゴル人は中華人民共和国という近代国民国家のエスニックグループとして「前近代」の文字を使い続けてきた。それが可能であったのは、中国でモンゴル語は国語ではなく、使用範囲がきわめて限定的で、標準語の形成もできないからであった。

しかし、内モンゴルでも第二次世界大戦終了後は、モンゴル人民共和国の新文字（キリル文字）を積極的に学び、1955年7月22日に内モンゴル自治区人民委員会による「モンゴル新文字普及に関する決定」が発布され、それにより終戦以来試行的に、非公式に行われてきた新文字学習運動が公式に、かつ全面的に実施されるようになった。自治区政府側は、新文字の普及を、「社会主義建設と社会主義改革及び文盲（非識字者）撲滅運動に新文字を機能させるため、4年間に（1959年5月まで）基本的に終了させ」、1956年からモンゴル語書籍の20%を新文字

で出版し、1960年には古典を除き、すべての書籍を新文字で出版する」と計画し、そのための印刷工場と機材、人員の準備を強調していた<sup>29</sup>。

ところが、1958年1月に周恩来による「当面の文字改革の任務」と題する報告が行われ、1958年3月に内モンゴル自治区人民政府は「新文字の普及を停止し、古い文字の学習と使用を強化することに関する決議」を発布した。その後の内モンゴルではモンゴル文字を使いつつ、「漢語拼音方案」にしたがうモンゴル語のラテン化も試み、1960年10月には内モンゴル自治区語文工作委員会から『新蒙文正字法』という「試用本」が出された<sup>30</sup>。

内モンゴルにおけるモンゴル語表記のラテン化は、中国国内少数民族語及び中国語表記のラテン化の方針に連動しながら1970年代まで続いた。1980年代から中国におけるラテン化の方針に変化が現れるのに連れて、内モンゴルでは伝統的なモンゴル文字の正書法を部分的に「矯正」しながら言文一致を図る動きが見られるようになった。

次に、時代は少しさかのぼるが、1930年代から内モンゴルのモンゴル人たちが取り組んだ言文一致の工夫について見る。

#### 四、言文一致をめざした1930-40年代の内モンゴル

モンゴル文字と口語の発音のずれに関する問題自体については、1828年から木版本で出されていた、トゥメドのガルサンによる *Mongγul üsüg-ün bügüde tayilburi bičig* (蒙文詮釋) にも具体的な説明があり、満洲文字の正確な表記も交えながら、特定の文字の口語発音がモンゴル文字で綴られている。同書では「口語」を am-a-bar kelelčegsen üges (口で話した語) と表現していた。これから考えても、モンゴル語の言文一致についての認識自体は、おそらく19世紀の初期からあったであろう。

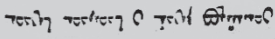
##### 1. 満洲国時代の文人ウルジー（施雲卿）とエルデネトグトフ（額爾敦陶克陶）

1930年代に入ってから東京でモンゴル語を教えていたハラチン・モンゴル人のウルジー（施雲卿）



が昭和11年(1936)に東京でモンゴル語教科書『現代蒙古語』(oduki üy-e-yin mongryul üges)を出版した<sup>31</sup>(図3, 4)。ここで「現代蒙古語」はモンゴル文字の表記を現代モンゴル語の口語発音に合わせて書くことを意味し、「口語」を qar-a üge (俗語)とした。18世紀前半に書かれた *jirüken-ü tulda sudur orusiba* でも qar-a üge が「俗語」や「口語」の意味であったのに対し、「文語」は nom-un üge (書籍語)であった<sup>32</sup>。実際、この教科書では、例えば、tere nige kümün (その一人)を ternig kün と、口語の発音通りに、tere nige という二語を ternig と一語として綴るなど、モンゴル文字を伝統的な正書法通りではなく、話しことばに合わせた大胆な言文一致を実行している。

満洲国時代、モンゴル語モンゴル文学の教育と研究に携わっていたエルデネトグトフ(額爾敦陶克陶1916-2001)<sup>33</sup>は、1942年に開魯で *Mongryul üsüg-ün sin-e toli* というモンゴル語文法書を刊行し、東蒙書局から出された *sin-e nemegsen üsüg* と施雲卿の『現代蒙古語』を「いずれも yerü-yin üge (sin-e udq-a) で書くための努力であった」と評価した<sup>34</sup>。ここで yerü-yin üge (普通のことば)は話しことば、

sin-e udq-a (新しい文)は口語の発音に合わせたモンゴル文字の新しい書き方を意味した。実際、エルデネトグトフは本書で取り上げた sin-e udq-a (シネ・オタグ)について、「シネ・オタグとは、文語を基準(標準)にし、その文語の変種を諸方言で共通に話している発音に基づいて書くことである」と定義している<sup>35</sup>。そして、シネ・オタグを使用する目的や重要性については、「言語は社会の変動に従って進歩するもので、文字もそれにつれて改善されるのが世界の古今に見られる諸国・民族の普遍的な原理である。そのため、わがモンゴルもこの原理からは逃れない」と述べ、700年前のモンゴル文語と懸け離れた現代の話しことばが書けるようにこのシネ・オタグを使用すると、その試みについて説明し、日本語の用語「言文一致」を初めてモンゴル語に直訳し、 (üge üsüg-i nigen bol'yaqui), すなわち「語と文字を一つにすること」とした<sup>36</sup>。本書でエルデネトグトフはモンゴル文字の歴史、正書法、品詞の分類、文の構造、言文一致の原理、方言と標準語の問題と自ら提唱したシネ・オタグの正書法をまとめている。その多くが日本語に由来する近代的な言語学の概念をモンゴル語の研究に導入し

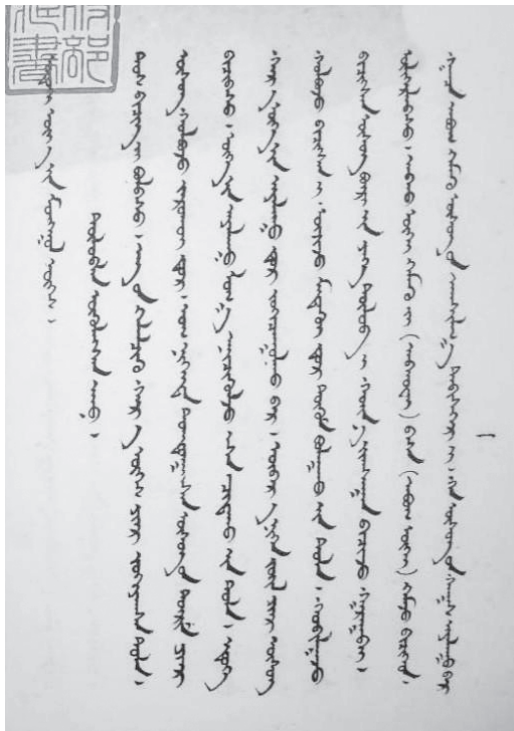


図3 施雲卿著『現代蒙古語』(1936) 1頁

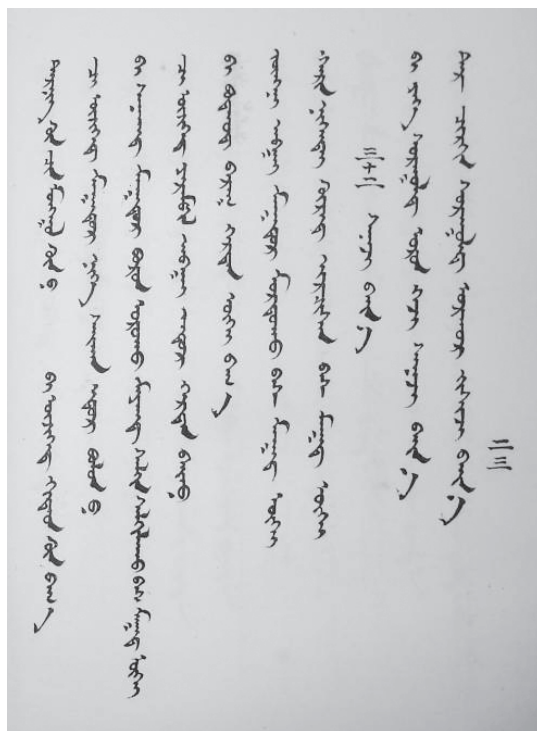


図4 施雲卿著『現代蒙古語』(1936) 23頁

たことになる<sup>37</sup>。

## 2. チンゲルタイ（清格爾泰）の言文一致と内モンゴルの現代モンゴル語

1949年8月に、当時内モンゴルの新聞社に勤め、後に内モンゴルを代表するモンゴル学者となったチンゲルタイ（清格爾泰 1924-2013）による *Mongγul kelen-ü jüi*（モンゴル語文法）が内モンゴル日報社から刊行された。翌年10月にその「第二版」が内モンゴル自治区人民政府文教部より出版され、その後香港でそのリプリントと英訳が出た<sup>38</sup>。本書はモンゴル国の著名な言語学者 Sh. ロブサンワンダンによる *Mongγul kelen-ü jüi*<sup>39</sup> に基づいて執筆されているが、ロブサンワンダンの著書にはなかったモンゴル語の言文一致の内容として、*ügečilejü bičijü ügečilejü ungsiqu tuqai*（単語単位で書き単語単位で読むことについて）が確認でき、そこには次のように説明されている<sup>40</sup>。

モンゴル文字で書かれた単語は、口語の発音を完全にあらわすことができないが、われわれは文を口語の文法に合わせて、単語単位で書くことができるのと、それを読む際に完全に単語単位で読むことができる。初めて学ぶ人に教える時は綴り通りに読ませる期間が必要であるが、文字が読め、ものが書けるようになってからは必ず単語単位で書かせ、単語単位で読ませなければならない。

モンゴル文字を単語単位で書くこと (*ügečilejü bičikü*) は教育の実践ではあまり見かけないが、単語単位で読むこと (*ügečilejü ungsiqu*) はよく知られている。それは上記「綴り通りに読ませる」(*ügečilejü ungsiqu*)、つまり、音節単位で読ませることに対して、小学校2、3年から実施する方法である。実際、1940年代までのモンゴルではモンゴル文字を読む際は綴り通りに、例えば、*baγatur*（英雄）の口語発音は「バートル」であるが、それを綴り通りに「バガトル」と読んでいた<sup>41</sup>。そのため、20世紀前半の内モンゴルの指導者として知られるデムチュクドンロブ (Demchügdongrob 徳王 1902-1966) も1942年に *dayudaly-a-yi töb bolyaqu minu sanal*（読み方を正しくするにあたっての私見）

と題する冊子を執筆し、出版していた<sup>42</sup>。

チンゲルタイの本書でも、モンゴル文字の綴りと現代語の発音のずれを示すにあたってはウルジー（施雲卿）とエルデネトグトフのようにそれをモンゴル文字で書いているが、しかし、それは発音を表記するためであり、モンゴル文字の正書法としての表記ではなかった。この点は後述する現在の内モンゴルの状況を論じるうえでたいへん重要である。つまり、中国語のローマ字表記＝「拼音」は発音を表す記号であり、正式な文字ではない。ここで述べていることはそれに似ている。

すなわち、チンゲルタイがここで示したのは、モンゴル文字の伝統的な正書法を維持しながら、例えば、「英雄」という意味のモンゴル語を伝統的な正書法通りに *baγatur* と書くが、それまでのように「バガトル」とは読まずに、口語発音通りに「バートル」と読むこととして、実際にモンゴル人民共和国で実施されていた言文一致の方法を内モンゴルに導入した。この点に関しては、エルデネトグトフの「言文一致」も満洲国時代に留まっていなかった。チンゲルタイの本書の執筆自体が、年長者の同僚でその後内モンゴル自治区語文工作委員会副主任（主任は自治区副主席）を長く務めたエルデネトグトフらによる「押しつけ」であったことをチンゲルタイは別稿で回顧している<sup>43</sup>。そして、内モンゴルにおける言文一致の方法がモンゴル国から学んだことであった点についてもエルデネトグトフの報告に「われわれはモンゴル人民共和国で旧文字を改善して使用した方法や経験に学び」と、類似した内容について詳しく述べている<sup>44</sup>。この問題の両者の関係性については今後の裏付けが必要であるが、具体的な実施はチンゲルタイの本書からであったと考えられる。

上に見た通り、「表1」（モンゴル文語口語対比名詞格助詞・動詞時制・主な形動詞、副動詞語尾一覧）はチンゲルタイの *Mongγul kelen-ü jüi*（モンゴル語文法）などを参照して作成されている。本書では、モンゴル文字を使いながらモンゴル国での言文一致に学び、格助詞語尾や動詞時制語尾などに関しては現代モンゴル語と同形の語尾を選び、文語の語尾を避けている。それが、その後の内モンゴルにおけるモンゴル

文字による言文一致の教育の発展及びチンゲルタイによって開拓された分野、すなわちモンゴル文字による「現代モンゴル語」(odu üy-e-yin mongγul kele)の構成、展開、研究にとって決定的な意義をもつようになった。

筆者は内モンゴルにおける言語問題についての歴史社会言語学的研究の結果としての見解を内モンゴルの学界及び関心ある人々に伝えるため、交流が深かったチンゲルタイ教授の葬儀に次の「弔文」を送った。ここに日本語の訳文をつけて掲載する。

清格尔泰先生，从留日时期开始关注蒙古民族新文化的发展。与同学们拭创了拉丁新蒙文书写法，二战结束后在内蒙古积极投入西里尔字母蒙文教学工作。由此开创了现代蒙古语研究工作，为中国境内现代蒙古语研究做出了巨大的贡献。尤其值得提到的是，清格尔泰先生于1949年根据蒙古人民共和国著名学者舍·罗布桑旺丹的著作编写的《蒙文文法》，不仅奠定了中国境内现代蒙古语研究的基础，更重要的是它为中国境内创造《言文一致》的现代蒙古书面语开辟了道路。深切悼念清格尔泰先生逝世。

日本，昭和女子大学人間社会学部教授  
社会学博士呼と巴特爾 2014年1月4日

チンゲルタイ先生は、日本に留学していらっしやった時期からモンゴル民族の新しい文化の発展に注目され、モンゴル人留学生たちとともにモンゴル語ローマ字正書法を作成されました。第二次世界大戦終了後、内モンゴルにおいてキリル文字の教育に積極的に取り組まれ、続いて現代モンゴル語研究に着手され、中国領内におけるモンゴル語研究に大きく貢献なさいました。特にここに取り上げるべきことは、チンゲルタイ先生が1949年にモンゴル人民共和国の著名な学者 Sh. ロブサンワンダンの著作に基づき、『モンゴル語文法』を執筆されたことにより、中国領内における現代モンゴル語研究の基盤をつくってくださっただけでなく、さらに重要なのは、中国領内において「言文一致」の「現代モンゴル語書きことば」がつくられる道を開いてくださったことです。チンゲルタイ先生のご冥福をお祈りいたします。

日本，昭和女子大学人間社会学部教授

## 五、文字改革への姿勢と伝統的な文字に対する認識

### 1. 文字改革の前提と伝統的な文字を崩した言文一致

現在、内モンゴルとモンゴル国を問わず、モンゴル文字からキリル文字へ移行した問題を論じる際、キリル文字の導入を、モンゴル語における口語表記体系の整備、つまり、近代国民国家の国語のあるべき姿としての、言文一致の結果であると捉えることは稀で、ソ連の政策によるモンゴル文字排除の結果であると考えられがちである。たしかにモンゴル語圏の国や地域にキリル文字が導入されたのはソ連の政策の影響であった。これは結果的には事実である。そのため、1990年代初期からモンゴル国で行われてきたモンゴル文字の復活は「ソ連から受けてきた抑圧を清算する上でも避けて通れない重要な問題であった。したがって、モンゴル国におけるモンゴル文字の問題はまず『復活』というセレモニー自体に意味があ」った<sup>45</sup>。しかし、このような考え方だけでは、20世紀前半にソ連の政策の影響が及ばなかった内モンゴル側の王公や知識人たちに見られたモンゴル語のローマ字表記の試み、上記ウルジー(施雲卿)の『現代蒙古語』とエルデネトグトフのシネ・オタグ(新しい文)による言文一致への努力、特に、第二次世界大戦終了直後からキリル文字を積極的に学びはじめた内モンゴル側のモンゴル語の近代化への強い意志については説明できなくなる。1920年代からのモンゴル国の状況についても同様のことが言えるが、具体的には前記拙論 Хөхбаатар (2019) (「現代モンゴル語の形成における Ts. ダムディンスレンの貢献——歴史社会言語学の視点から——」原文はキリル文字モンゴル語)に譲りたい。

ここで考えるべきことは、モンゴル語の口語表記体系の整備や導入は、モンゴル語の独立性とモンゴル語間の統一性が前提となる規範でなければならなかったということである。そういう意味で、1950年代の内モンゴル自治区におけるモンゴル語表記のキリル文字化を含め、モンゴル人民共和国とソ連邦のブリヤート自治共和国、カルムイク自治共和国で

のラテン文字化、キリル文字化はいずれもモンゴル語圏内での共通性に配慮をしていた。しかし、1973年に中国で進められた「モンゴル語標音ラテン字母方案」のようなモンゴル文字改革案はこのような性質のものではなかった。中国政府の少数民族文字改革の一環として、「モンゴル語標音ラテン字母方案」(蒙語標音拉丁字母方案)の異なる「案」が、中央民族学院蒙古語文教研組、内蒙古語文歴史研究所、内蒙古大学蒙語研究室によってそれぞれ提出されたが、いずれも中国国務院「少数民族文字方案における字母設計に関する五原則」(1957年12月10日)によるもので、「漢語拼音方案」に極力一致させなければならなかった<sup>46</sup>。

そのため、内モンゴルにおける今後のモンゴル文字改革もこのような問題に直面するだろうが、キリル文字への移行は言うまでもなく、中国におけるラテン化の方針が変更され、中国領内のモンゴル語表記のローマ字化も考えられない現在、モンゴル語の言文一致の手段は、1930、40年代に見られたような、「伝統的な文字」としてのモンゴル文字の正書法を部分的に崩して口語発音に対応させるような「改革」しか道が残されていない。これは根本的な問題解決にはつながらないため、真の意味でのモンゴル語の言文一致にはならず、結果として伝統を壊すだけのこととなる。つまり、1930、40年代に内モンゴルの優秀な知識人たちが熱心に試みても成功しなかった道を、約80年後の内モンゴルが再び歩もうとしていることに等しい。これは要するに、その後の内モンゴルにおいて、チンゲルタイ等の試みで文体の改革が大きく進められたにもかかわらず、文字と発音のずれの問題は依然として深刻であることを示すものであろう。

実際、1980年以來中国で漢字が評価されるようになり、それにより漢語のラテン化の方針に変化が見られ、また、少数民族語のラテン化の動向も変化したため、内モンゴルでは言文一致をめざして伝統的なモンゴル文字の正書法を改める動きが現れた。その中で比較的影響力があつたと考えられる論述として、昂如布 包力高「關於改進蒙古文的探討」<sup>47</sup>等があつた。そして、最近社会的に広く議論を引き

起こしているのが『蒙古文正字法詞典』(*Mongγul jöb bičilge-yin toli*)である<sup>48</sup>。

この辞典ではモンゴル文字を現代語の発音に合わせる工夫として、例えば、saral(馬の毛色「白」)をsaγaralに、ür(夜明け)をüürに書き換え、伝統的な正書法では短母音であった表記に、長母音の表記としてのvγvと短母音をもう一つ追加している。そのため、γoul(川)と二重母音で書かれながら短母音として発音される単語もγolと修正しなければならず、また、abu(父)やeji(母)のaとeも同じく短母音で書かれ、長母音で発音されることになるのだが、これらの単語は修正されていない。この辞典で修正された単語はすべて言文一致のためではなかったが、約2000字という膨大な数の伝統的な文字の正書法が「修正」されたばかりでなく、モンゴル語基本語彙の過度な「漢語化」も見受けられ、これが批判の対象になっている<sup>49</sup>。

1950年代以來、内モンゴルでは1937年にモンゴル人民共和国科学アカデミーから出版されたŠarja, *Mongγul üsüg-ün dürim-ün toli bičig*(『モンゴル文字正書法辞典』)が広く使用され、1951年に内モンゴルでリプリントされた同書は、1960年に北京で「第二次印刷」が行われている。それにより、中国側では伝統的モンゴル文字における単語表記もモンゴル人民共和国の字典を基準に規範化され、国境両側におけるモンゴル文字正書法が統一されていた<sup>50</sup>。

## 2. モンゴル文字に対するモンゴル国と内モンゴル側の認識の違い

伝統的なモンゴル文字に部分的に「外科手術」を行う際、知るべきことは、モンゴル文字は内モンゴル自治区など中国領内のモンゴル語における現代の文字ばかりではないということである。つまり、重要なのは、モンゴル文字は「前近代」の文字として、民族と国家を超えたモンゴル文語の世界の共通の文字であり、歴史的文献としての文語資料はそれによって綴られているのであり、現代のモンゴル人はこれを次の世代に伝えなければならない義務があるということである。

モンゴル国では国語の表記体系としてキリル文字

を導入しているが、モンゴル文字を部分的に、かつ体系的に崩した痕跡を残していない。モンゴル文字の「伝統」という意味において、1990年代からモンゴル国で行われてきたモンゴル文字の復活は、あくまでも1940年代までモンゴル国で使用されていたモンゴル文字の原形を取りもどすことであり、それ以降内モンゴルで部分的に変更された文字の形には「モンゴル民族の伝統的な文字」としてアイデンティティを求めないものである<sup>51</sup>。前に見たように、1940年代後半からモンゴル人民共和国でキリル文字による言文一致が実施されたのとほぼ同時に、内モンゴル側はそれに倣い、モンゴル文字における格助詞や動詞時制語尾を口語体に直すなど、モンゴル文語ではあまり見られないような字形も現れている。それ自体は、内モンゴル側のモンゴル人が現代社会で伝統的な文字を使うための工夫と努力、つまり、文体の言文一致のための重要なステップであったため、積極的な現象であると考えられる。

モンゴル文字は内モンゴル自治区では「自治区の通用文字」である<sup>52</sup>が、モンゴル国では法律上の用語が2015年に採択された「モンゴル語関連法」では *ündesnii bichig* (民族・国家の文字) である。しかも「*ündesnii bichig* とは伝統的なモンゴル文字 (*ulamjalt mongol bichig*) である」と、同法第4条の1.3で定められている。そのため、この *ündesnii bichig* は「国家の文字」としてモンゴル国に限定されず、伝統的なモンゴル文字を使用し続けてきた内モンゴル自治区など中国領内のモンゴル民族地域で使用される文字であるとも理解される<sup>53</sup>。実際、モンゴル国では1990年代初め以来さまざまな障害、特に経済的な危機を乗り越え、現在はモンゴル民族の重要な文化遺産として伝統的なモンゴル文字を復活させている最中である。

したがって、現在の内モンゴルなどでモンゴル文字を使用しながら、モンゴル語発音の規範化を進めるためには、現在実施中のチャハル方言に基づく「標準音」の体系を、単語レベルの音声表記の体系から文レベルで対応可能な音韻表記の体系としてさらに充実させ、普及することが求められる。なぜならば、孤立語である中国語は「漢語拼音方案」のよ

うな単語別の表記体系でも、文レベルでローマ字表記が発音の規範として十分機能するが、膠着語であるモンゴル語では単語と語尾や接尾辞の接続によって発生する短母音の無声化など、モンゴル語キリル文字正書法にある「あいまい母音の法則」(*балархай эгшгийн дүрэм*) のような複雑な法則が求められる。そのため、その実現にあたり、モンゴル国のキリル文字の正書法が客観的によい見本となる。

## おわりに——モンゴル語の文字の問題は言文一致の問題

漢文と漢字は漢字圏諸国の共通の文語と文字であった。そのため、近代における漢字圏諸国の言文一致は漢文体との戦いと、漢字音の標準化であった。モンゴル文語と伝統的なモンゴル文字も民族と方言を超えた「前近代」の言語と文字であった。モンゴル文字は縦書きしかできないだけでなく、口語の発音を正確に表記できない。しかし、言文一致の「言」は口語発音の標準化を求めるものである。そのため、モンゴル文字は発音の規範を強く求める近代国民国家の国語の文字としてはふさわしくない。

モンゴル語の言文一致が直面したのも実際、文語文体の口語化とモンゴル文字を口語表記ができる文字に変えるか、部分的に改善するかであった。モンゴル文語圏の一部であったソ連のカムイク自治共和国、ブリヤート自治共和国、トゥバ共和国とモンゴル人民共和国は前者の「文字改革」を実施し、中国領内の内モンゴル自治区などでは伝統的なモンゴル文字を使い続けてきた。それが可能であったのは、中国でモンゴル民族は言語的マイノリティーで標準語がつかれないこととも関係があった。しかし、内モンゴル側は言文一致の問題に直面しなかったわけではなかった。1930年代から満洲国内のモンゴル文人らは日本語の「言文一致」を *üge üsüg-i nigen bolyaqui* (語と文字を一つにすること) と直訳しながらその対応に取り組んだ。しかし、その試みはモンゴル文字を口語の発音に合わせて部分的に書き換えることに留まり、体系的な言文一致にはつながらなかった。

1945年以降、内モンゴルではモンゴル人民共和

国に学び、モンゴル文字を使用しながらモンゴル文語の文体を現代モンゴル語の文体に変えることができたが、モンゴル文字と口語発音のずれの問題は依然として解決できず、現在も約80年前に取り組んだようなことを繰り返している。これでは体系的な言文一致ができないばかりでなく、モンゴル文字の伝統的な正書法を崩すことになる。その際知るべきことは、モンゴル文字は中国領内で使われている現代の文字だけでなく、モンゴル文語圏共通の文語の文字であり、現在のモンゴル人は後世に伝える義務があるということである。そして、モンゴル国ではモンゴル文字をキリル文字に変えているが、モンゴル文字の伝統的な正書法を崩した痕跡を残していないことも合わせて知るべきであろう。

モンゴル文字を使いながらモンゴル語の言文一致を果たす手段としては、漢字を使いながら中国語の発音の規範化に成功している中国語の「漢語拼音方案」の使い方に倣い、内モンゴルの「標準音」の表記体系を文レベルでも機能できるよう充実させるなど、モンゴル文字の伝統的な正書法の破壊を挽回することを切実な課題として考えるべきであろう。標準音の表記体系の整備にはモンゴル国のキリル文字の正書法が客観的にたいへんよい見本になる。

当事者としての内モンゴルのモンゴル人は、モンゴル語の文字の問題を単純な文字問題と理解せずに、「言文一致」という「現代モンゴル語」形成の原理の根本から理解を深めることが求められる。「言文一致」への理解はモンゴル国の文字問題を議論するうえでも有効である。

#### 注

- 1 本論の一部は筆者が2019年5月25日に東京大学（駒場言文一致科研・講演会）で行った「モンゴル語における『言文一致』の問題と Орчин цагийн монгол хэл（現代モンゴル語）の形成」という講演内容に基づくもので、それには筆者の Хөхбаатар (2019)（「現代モンゴル語の形成における Ts. Дамディンスレンの貢献——歴史社会言語学の視点から——」原文はキリル文字モンゴル語）に一部重複する内容があったが、ここではそれについても大幅に書き換えている。
- 2 田中克彦 (2018) 360 頁
- 3 「調整」ばかりか、「日本の近代は、漢詩文的なるものから離脱することによって、もしくはそれを否定することによって、あるいはそれと葛藤することによって成立した」（齋藤希史 2014, 226 頁）とされ、また、「訓読体が脱＝漢文だとするなら、言文一致は、反＝漢文として成立している」（齋藤希史 2014, 228 頁）と考えられている。
- 4 М. Баярсайхан (2019) Монгол бичгийн хэлний найруулга дахь манж хэлний нөлөө (M. バヤルサイハン「モンゴル語の文体にみられるマンジュ語の影響」「2019年日本モンゴル学会春季大会」での口頭発表)
- 5 グスタフ・ラムステッド, 荒牧和子訳 (1992) 53-54 頁
- 6 上掲書 67 頁
- 7 上掲書 7 頁
- 8 ア・デ・ルードネフ著 山口茂一訳 (1919) 17 頁
- 9 大藪鉦太郎著 (1920) 12 頁
- 10 前掲書 255-258 頁
- 11 ハルハ方言を基盤とするモンゴル国語では正書法上の хүйтэн「寒い」が実際 хүүтэн と発音されるように二重母音 үй の長母音化が顕著である。
- 12 大藪鉦太郎著 (1920) 223 頁
- 13 前掲書 227 頁
- 14 前掲書 224 頁, 前記「セーン」と「セーハン」と同様、「バヤルテ」も「バヤルテー」と「テ」が長母音をともなうべきである。
- 15 出村良一「蒙古の言語と文学」『国漢』第八号 昭和7年7月 5 頁
- 16 Nicholas Poppe (1954).
- 17 Nicholas Poppe (1954) p. 1. 邦訳は筆者に拠る。
- 18 Д. Төмөртоого (2017) p. 114. 邦訳は筆者に拠る。
- 19 Д. Төмөртоого (2002) p. 319.
- 20 フフバートル (2018) 312(77)頁
- 21 Д. Төмөртоого (2002) pp. 56-57.
- 22 フフバートル (2007) 88 頁
- 23 羅常培「受過十月革命洗礼的國際主義學者——謝爾久琴柯」『中国語文』1957年11月号 10-13 頁  
Хөхбаатар (2020), pp. 268-270
- 24 Боржигидай оюунбилиг, Монгол хэл бичиг Дайчин гүрний эхэн, дунд үеийн Төвдөд, Олон улсын монгол судлалын холбооны Азийн хурал II, 2018.11.3-4

- Токио, Шоова эмэгтэйчүүдийн их сургууль.
- 25 フフバートル (2016) 20 頁
- 26 Čenggeltei, *Mongγul kelen-ü jüi*, Öbür mongγul-un edür-ün sonin-u qriy-a, 1949. 小沢重男著『モンゴル語の話』(大学書林, 1982) に基づき筆者作成。
- 27 フフバートル (1997) 26-43 頁。現代モンゴル語では実際第二音節以降の短母音はあいまいになるが、ここではその記述を省略する。
- 28 Г. Цэрэндорж (1976) p. 8. 邦訳は筆者に拠る。
- 29 Erdenitoγtaqu (1956) pp. 239-240.
- 30 フフバートル (2014b) 9-12 頁
- 31 施雲卿著『現代蒙古語』東京求文堂 昭和11年(1936)
- 32 現在は「俗語」や「口語」を qar-a yariy-a とするのが普通で, qar-a üge (直訳: 黒いことば) は現在の内モンゴルでは「隠語」のニュアンスが強い。それは中国語の「黒話」(隠語) の影響であろうか。
- 33 ジョーオド盟 (現, 赤峰市) ヘシグテン旗出身, 内モンゴル人民出版社社長等を経て 1955 年以降内モンゴル自治区語文工作委員会副主任を長年勤め, モンゴル文学と内モンゴルにおけるモンゴル語の問題に関する政策の実施に積極的な役割を果たしてきた。2010 年に *Erdenitoγtaqu* (『額爾敦陶克陶全集』11 卷本) が内モンゴル文化出版社から出た。
- 34 Erdenitoγtaqu (1942), *Mongγul üsüg-ün sin-e toil*, Čing lin, Ü, Tuyay-a (2015) p. 401.
- 35 上掲書 p. 405.
- 36 上掲書 p. 397.
- 37 フフバートル (2014b) 18 頁
- 38 フフバートル (1999a) 316 頁
- 39 Lubsangwangdan (1939), *Mongγul kelen-ü jüi*, Arad-i gegeregülkü yamun-u keblel, Ulaγanbaγatur.
- 40 Čenggeltei (1950) p. 192. 邦訳は筆者に拠る。
- 41 フフバートル (1999a) 317 頁
- 42 Demčurdongrob, *darudalγ-a-yi töb bolγaqu minu sanal*, Čing lin, Ü, Tuyay-a (2015) pp. 267-284.
- 43 フフバートル (2014b) 6 頁
- 44 Erdenitoγtaqu (1956) pp. 227-228.
- 45 フフバートル (1999) 334 頁
- 46 内モンゴル語文工作指導小組辦公室「蒙古語文工作情况簡報」(第 10 期) 1973 年 11 月 1 日
- 47 昂如布 包力高「關於改進蒙古文的探討」『蒙古学資料与情報』1987 年第 1 期 41-48 頁
- 48 「蒙古文正字法詞典」編委会『蒙古文正字法詞典』(*Mongγul jöb bičilge-yin toli* 修訂本, 内蒙古出版社 2011 年)
- 49 Č. Kesigtoγtaqu (2017) pp. 314-323.
- 50 フフバートル (2014b) 6 頁
- 51 フフバートル (1999b) 338-342 頁
- 52 内モンゴル自治区人大常委会法制工作委员会『内モンゴル自治区蒙古言語文字工作条例』(2004)「第二条」20 頁
- 53 フフバートル (2018) 323(66)-324(67)頁

#### 参考文献

##### 日本語

- ア・デ・ルードネフ著 山口茂一訳 (1919)『蒙古文典』京都大学 (非売品)
- 大藪鉦太郎著 (1920)『日本語と蒙古語』満洲日日新聞社
- グスタフ・ラムステッド, 荒牧和子訳 (1992)『七回の東方旅行』中央公論社
- 齋藤希史 (2014)『漢文脈と近代日本』(角川ソフィア文庫) 角川学芸出版
- 田中克彦 (2018)『国やぶれてもことばあり』(田中克彦 セレクション II 言語学と言語学史篇) 新泉社
- フフバートル (1997)『続モンゴル語基礎文法』インターブックス
- (1999a)「忘れられたモンゴル人——台湾の「蒙籍人」たち」和光大学モンゴル学術調査団『変容するモンゴル世界——国境にまたがる民——』新幹社
- (1999b)「国境にまたがる民族の言語——モンゴル民族の言語問題の現状——」和光大学モンゴル学術調査団『変容するモンゴル世界——国境にまたがる民——』新幹社
- (2007)「現代中国の言語政策 普通話普及と少数民族語」山本忠行, 河原俊昭編『世界の言語政策 第 2 集 多言語社会に備えて』くろしお出版
- (2014a)「内モンゴルにおけるモンゴル語の文字改革の問題——終戦後のモンゴル人民共和国「新文字」の影響を中心に——」『学苑』(人間社会学部 紀要) No. 880
- (2014b)「内モンゴルにおける「現代モンゴル語」の形成過程とその政治的側面——モンゴル人民共和国からの影響に焦点を当てて——」『学苑』No. 883

————— (2016) 「トゥバ人民共和国のモンゴル語定期刊行物——1920年代から1930年代までの「ウネン」紙の変遷を中心に——」『昭和女子大学国際文化研究所紀要』vol. 22

————— (2018) 「モンゴル国の言語法と『現代モンゴル文章語』—モンゴル国「国家公用語」定義用語についての分析—」『東洋文化研究所紀要』第173冊

英語・モンゴル語

Nicholas Poppe (1954), *Grammar of Written Mongolian*, Otto Harrassowitz.

Г. Цэрэндорж (1976), *БНМАУ-д бичиг үсэг үл мэдэх явдлыг арилгасан нь*, Улаанбаатар.

Д. Төмөртоого (2002), *Монгол хэлшинжилэлийн онол, түүхийн асуудал*, Улаанбаатар.

————— (2017), *Монгол хэлний түүхэн авиа зүйн үндэс*, Улаанбаатар.

Хөхбаатар (2019), Орчин цагийн монгол хэл бүрэлдэн тогтоход Ц. Дамдинсүрэнгийн оруулсан хувь нэмр: Түүхийн нийгэм хэлшинжлэлийн үүднээс, Монгол улс Шинжлэх Ухааны Академи Хэл зохиолын хүрээлэн, *Монгол улсын төрийн гурван удаагийн шагналт, ардын уран зохиолч, академич Цэндийн Дамдинсүрэн*, Улаанбаатар хот.

————— (2020), ЗХУ-ын зөвлөгч Г. П. Сэрдоченко ба “утга зохиолын хэл”: Архивын дотоод материалуудаас 1950-аад оны БНМАУ ба Өвөр Монголын монгол хэл утга зохиолын хэлний харьцааг харах нь, Түвшинбаярын Хөхбаатар, Нагаанбуугийн Маралмаа, *XX зууны Монголын ертөнц*, Токио-Улаанбаатар.

Galsang, *Mongγul üsüg-ün bügüde tayilburi bičig*, Öbür mongγul-un arad-un keblel-ün qoriy-a, 1979.

Lubsangwangdan (1939), *Mongγul kelen-ü jüi*, Arad-i gegeregülkü yamun-u keblel, Ulaγanbaγatur.

Čenggeltei (1950), *Mongγul kelen-ü jüi*, Öbür mongγul-un edür-ün sonin-u qriy-a.

Erdenitoγtaqu (1956), Ündüsüten-ü keke bičig-i kereglen kögǰigülkü tuqai nam-un bodulγ-a -yi ulam tuuštai beyelegülkü-yin tölüge temečejegey-e, *Ündüsüten-ü keke bičig-ün torü-yin bodulγ-a -yin tuqai bičig material-ud*, “Mongγul keke bičig” nayiraγulqu keltes bayannaγur ayimaγ-un mongγul keke bičig-ün aγil-un jöblel, 1980.

Čing lin, Ü, Tuyaγ-a (2015), *Mongγul kelen-ü sudulul-un durasγaltu bičig- üd*, jirγuduγar emkidkel (Mongγul tulγur bičig- ün čubural), Öbür mongγul-un keblel-ün bülüglel. Öbür mongγul-un soyul-un keblel-ün qoriy-a.

Č. Kesigtoγtaqu (2017), Erdenitoγtaqu ba odu-yin mongγul keke bičig-ün aγil, Č. Kesigtoγtaqu, *Mongγul üsüg mongγul bičig*, Öbür mongγul-un arad-un keblel-ün qoriy-a.

本論文は独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C)研究課題番号: 18K00586「現代モンゴル語書きことばの形成」)による研究成果の一部である。

(フフバートル 現代教養学科)